
リーユの楽園

海月 涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リーユの楽園

【Nコード】

N3921A

【作者名】

海月 涼

【あらすじ】

突然の別世界。聞きなれない言葉の数々。安芸に降りかかった運命は、偶然なのか必然なのか・・・？

第一話：出会い（前書き）

あー、完結できるか未定なんです（汗
こんな未完成な小説でよければ感想などいただけましたら励みになります。

第一話：出会い

甘い香りが沸き立つ。

安芸はお香が煙る中、一人佇んでいた。特に目的もなく、ここがどこなのかもわからない。いつの間にこの場所に立っていたのかさえも。

安芸は直前までの記憶を辿っていた。

確か、学校の教室で、親友の美咲と取り留めのない話をしていたはず。今流行りのファッションや最近買ったコスメ、駅前のジュエリーショップが新作を入荷したという事や昨日見たテレビの話。それはどこにでもいる女子高生のどこにでもある日常の放課後。

なのに：

何故自分だけ、今ここに立っているのだろう：

目の前に広がるのはどこまでも続く長い廊下と両サイドに並ぶいくつものドア。

安芸が立っている後方にもそれと同じ景色が広がっている。何回か回れば最初自分がどっちを向いていたかわからなくなるぐらいに。歩いていいのかわからなかった。今自分がいる場所を容易に離れてしまっただけいけないような気がした。だが、ただその場に立ちすくんでいても何も変わらない気もした。

「美咲…？」

親友の名前を呼んでも返事は当たり前のように返ってこない。それどころか確かに発したはずの自分の声すらも聞こえなかったような気がした。

足下のふかふかした深紅の絨毯と両側の綺麗に磨きあげられたチョコレート色の窮屈な壁。金色の細工が施されたドア、前後方に見える闇。その全てに吸収されてしまったような感覚。

安芸は完璧に一人だった。見たことも想像したこともない風景。そこに佇む自分が、どこか滑稽で不安を祓うために半ば無理に笑みを作った。

突然、安芸は思い出したように鞆を探った。辛うじて持っていた鞆。確かこの中に携帯電話を入れていたはず…

安芸の記憶は正しかった。鞆の奥の方にしまいこんであった携帯電話を取り出し、開いた。

『5月10日金曜日16時27分』

ゴシック体で書かれた文字を見つめ、記憶を手繰り寄せる。

美咲と教室で話していたときから一日たりとも時間は過ぎていなか

った。安芸が最後に時計を見たときからおよそ20分が経過している。

安芸はさらに携帯電話の上部に目を走らせた。

『圏外』

赤い文字でそう記されているのを見ると自然にため息がでる。外界との連絡は不可能。安芸は仕方なしにペンケースを探り油性ペンを取り出した。両手をいっぱい伸ばせば届きそうな距離にある壁。その片側に『5月10日金曜日16時30分』と記した。

お香の香りの中、微かに油性ペンの匂いが漂い、それが妙に現実的だった。

もう一度軽くため息をつき、月日の上に大きめに矢印を書き、その方向の通りに安芸は歩きだした。両側のドアを数えながら20個に1回壁に数を記しながら歩いた。

景色はどこまでも行っても変わらなく続く。この景色の終わりには何があるのか、はたまたこの先に終わりなどあるのだろうか…

歩いて

歩いて

歩いた。

173個目のドア。そのドアは他のドアと細工が違った。金色の装飾がなく、代わりに黒い線で女性をモチーフにしたと思われる抽象画が描かれている。胸の中央に緑色に輝く拳大の石はめ込まれていた。

安芸はそのドアの横に『173』と記し、ドアの前に立った。念のためにカッターを持ち、静かにドアをノックする。

返事は、ない。

ドアノブに手をかけると冷や汗が頬を伝った。
ひんやりとしたドアノブ。ゆっくりと回しドアを押した。

カチャ

目の前に広がったのは小さな暗い部屋。カッターを持つ手に一層力を込め、ゆっくりと部屋に入る。

「誰か…いる？」

廊下と比べこの部屋では安芸の声が全体に反響した。

部屋の中は静まり返り、何者の気配もなかった。部屋の奥には乱雑に紙が置かれている机があった。その他にある物は木の立派な椅子に座った大きいテディベア。床のあちこちに散らばっているビー玉。それと、緑色の鍵。

ゴクリと唾を飲み込みさらに部屋の中に進むと、突然視界が闇に覆われた。

「…ッ!？」

一瞬、何が起きたかわからず、安芸はただ暗闇に目を慣れさせるだけで一歩も動けなかった。頭の中では安易に行動を起こしてしまった、たった1分前の自分をしきりに恨んでいた。

闇に目が慣れると、ただたんにドアが閉まっただけというあっけない事実が判明した。

(なんだよ…)

軽い安堵の息を吐き、部屋の中を見渡す。高鳴っている鼓動は未だ落ち着きを取り戻してはいない。

机の傍まで歩みを進め、散らばった紙を一枚、手に取ってみた。

「リーユの楽園……？」

紙の上部に書かれたやや大きめの文字。辛うじて読めるぐらいに崩してある文字を拾い読みする。

「リーユの……楽園を……作りあげるために……は……資金……人材……王、朱………珠？」

机の椅子に腰掛けようと後ろ手に探る。

「実王見……あ、実現か、実現には……ハヤミ……？が必要で……」

訳の分からない単語が連なる文章。興味深いともなんとも思わない。

「だれ？」

「ッ！？」

気配は…ない。だが物音一つしない部屋の中、確かにその声は安芸の耳に響いた。思わずカッターを構え、恐る恐る振り返った。

光のないはずの部屋。しかし、確実に光っていた。白い肌、赤い瞳、黒い髪。年齢にして10歳前後、真っ白な素足に真っ赤なエナメルの靴を履き、座り込んでいる少女。そして、それを取り巻くぼんやりとした光。

「だれ？」

少女は深紅の唇から再度言葉を発した。艶があり、甘えたような、キャンディボイス。

安芸は戸惑った。質問に答えるべきか否か。聞きたいこともたくさんあった。だが、果たしてこの少女は安全な存在なのだろうか…

「あたし、コユ」

少女改め、コユが微笑みながら見つめる。その微笑みは天使のように安らかなものであり、しかし死に神のようにどこか不気味さも放っていた。

「あ、私は…」

反射のように自己紹介を返す。

「安芸です」

汗が滲むが決して暑いわけではない。寧ろ、肌寒さすら感じている。コユは床に座り込んだまま身動き一つとろうとはしない。安芸もまた、動けずにいた。

「アキちゃんは、何？」

「え…？」

突拍子もなく意味も分からない質問。安芸の頭の中では様々な回答が目まぐるしく回っていた。

（何って…？女……学生…人間…）

自分の身分を証明する事柄を浮かべては言葉に出せずに消していく。

「コユはキュアラ。アキちゃんは？」

「キュ、アラ？」

聞きなれない単語に反応し、思わず持っていたカッターを床に落としてしまった。

「キュアラ。アキちゃんは…」

コユが何かを言いかけたとき、椅子に座っていたテディベアが動きだし、コユの耳元で何かを囁いている素振りを見せた。

「ひっ!!」

慌ててカッターを拾い上げ、持ち直す。

「そっかぁ…」

テディベアが離れるとコユは幾分つまらなさそうに指を口にくわえ、安芸を見た。

まったく何も分からなかった。テディベアが動く理由もコユがつまらなそうな訳も。頭に激痛が走り、真っ白になっていく。その最中で微かに声が聞こえた。

それは、男とも女ともとれる美しく、澄んだ声。

『女神の受胎が始まる…』

その声を聞き終わらないうちに、安芸はその場に崩れ落ちた。

第二話：一時帰還

「安芸ッ!？」

暗闇で声が聞こえる…

「安芸ッッ!？」

これは、そう…美咲の声。

「先生え!! 安芸があッ!!」

ぼんやりとした意識の中、陽炎のような光に辿り着く。

ここは…

ひどい頭痛。回る世界。赤や黄色のノイズが走る。

ひんやりとした感覚と焼けるような感覚。片方は額に、そしてもう片方は胸に…

目を開けると、そこは見慣れた教室だった。

「み、さき?」

必死で絞り出した声が枯れていた。口の中がカラカラに乾いている。

「あ、き…？安芸ッッ！！」

今にも泣き出しそうな親友の顔の右頬の奥に時計が見える。
16時40分。

「安芸…大丈夫？」

焦点の合わない瞳を覗き込み、顔色を伺う。
美咲の隣には、地学担当教員の長野。

「丹下…大丈夫か？」

掠れた声にすぐさま反応し、安芸は重い体を起こした。

「大丈夫です…美咲、帰ろ」

安芸は長野が嫌いだった。甘いルックスに似合わないハスキーボイス。そのギャップに惹かれる女生徒は多くいる。しかし、安芸はそ

の陰にある長野の視線に時として恐怖を感じていた。

「う、うん」

美咲も長野に憧れている一人ではあったが、安芸が彼を嫌いなことぐらいは理解していた。

「さよーならあ」

美咲の声が廊下に響く。

誰もいない廊下。昼間の賑やかさが嘘のように、取り残された空間。遠ざかる一つの足音と、並び奏でる二つの足音。

窓の外にはオレンジ色に光る街頭と、風に揺れる木々。だだっ広いグラウンドに部活に精を出す生徒たちの姿が見える。微かに聞こえるクラシックは吹奏楽部が奏でているのだろう。

安芸はこの空気が好きだった。

学生でしか味わえない、もの寂しさと、静けさの中和。ドキドキするような孤独感と不思議と沸き上がる懐かしさ。その一つ一つが安芸は愛しかった。

冷たいローファーに履きかえ、玄関を出ると、煌々と輝く夕日が眩しく、一瞬目眩を感じた。

(さっきのは…夢?)

全てが日常そのもの。隣には美咲がいて、教科書の入っていない鞆を持ち、九割が坊主の野球部の練習の合間を縫って校外にでる。ラニングしている陸上部の横をゆっくりと歩き、大通りのアイス屋の新商品の話題に花を咲かせ、近くの公園で遊ぶ弟を呼び、家の前で美咲と別れた。

なにもかも、普通。一つの狂いもなく、周りでは時が流れている。ただ一人、違和感を胸に抱いた安芸を取り残して。

「ただあいま…」

ビーフシチューの香りが舞うリビングを通り越して、自室の扉を開ける。

（夢、なわけがない…）

確に残る記憶。疲れている足。ペンケースからこぼれた油性ペン。制服からは微かにお香の匂い。

（でも…）

あんなにも長く感じられた時間。実際は、たったの10分強。

（わっけ…わかんないし…）

ベッドに座り込むとお気に入りのクッションを胸に抱き、顔を埋めた。

（コユ…キュアラ…リーユの、楽園…）

知らない言葉ばかりの不思議な世界。

ドキドキする…

あの香りも、雰囲気も…

愛しいけれどつまらない日常。同じ事の繰り返しの世界。少し怖いけれど…出来ることならもう一度…

「安芸いゝご飯ッ!!」

安芸の思考とは裏腹に陽気な兄の声。

「着替えたら行く」

聞こえるか聞こえないかの声でそう呟き、制服を脱ぐ。

わざと短くおり曲げたスカートを脱ぎ、部屋着であるスウェットに履きかえ、セーラーを脱ぎ捨てる。

(夢だとしても…)

あの映像や、感覚、声はリアルすぎた。特に最後に聞いた声は。

(女神の…受胎…)

刹那、安芸の胸に痛みが走った。

『そう。貴女は選ばれし者。女神の受胎に立ち会うべき、聖なる者…』

耐えがたい激痛と目眩。あの時に聞こえた澄んだ声。

目の前には、左胸を押さえた自分を写す鏡がある。苦痛に歪んだ顔。強く押さえられた左胸からは、微かに赤い光が漏れていた。

澄んだ声は更に言葉を続けた。

『その紋章は証。貴女が貴女である証…』

朝から開け放たれている窓からは静かに夕に暮れた風が流れてくる。頬に風を受け、痛みに堪え、安芸は必死に頭を働かそうとしていた。

(声…誰…?)

(選ばれし、者?)

(紋章って…)

回らない頭で考えたところで、全てにおいて答えは到底出ない。

安芸は遂にその場に崩れ倒れた。意識は朦朧とし、世界が回りながらフェードアウトしていく。夢か現実かすらわからない暗闇の世界の中で痛みにもがく安芸。

(左、胸が、熱い…)

言葉が出ない。発声法を忘れてしまったかのような感覚。地に着いていないような不安定な感覚。光の见えない世界。

そして、不思議とどこからか懐かしい香りが漂ってきた。

そして、あの声。

『貴女には使命があるのです。リアラとしての使命が…』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3921a/>

リーユの楽園

2010年12月3日05時23分発行